

## ウパニシヤットの成立年代(下)

中村 元

一 古ウパニシヤットの相対的年代關係

二 古ウパニシヤットの絶對年代決定の標準(以上)

三 初期ウパニシヤットと中期ウパニシヤットとの年代的關係

四 結論

附論 新ウパニシヤットの成立年代(以上)

### 三 初期ウパニシヤットと中期ウ

#### パニシヤットとの年代的關係

次に、カータカ以前に成立した諸ウパニシヤットの年代は如何と云ふに、もはや成立年代確定の爲には何らの手がかりも存在しない。従つてわれわれは漠然たる推定の範圍を出ることができないのである。たゞ成立順序について云ふならば、諸學者の研究の一致せる如く、量の上からも最大である

ブリハド・アーラニヤカとチャーンドーギヤとが最も古く成立したものであり、言語・文體・内容ともにブラーフマナ的な特徴を示してゐる、その兩者の中でもブリハド・アーラニヤカの方が古く成立したといふことも一般學者の承認するところであり、更にそのブリハド・アーラニヤカについても、*Īśava* 派所傳よりも *Māhyasādhina* 派所傳の方が古い形態を示してゐると云はれてゐる。<sup>(一)</sup>

またブリハド・アーラニヤカ及びチャーンドーギヤ兩ウパニシヤットも同一時に著されたものではなくて、長年月の間に徐々に造られて傳へられてゐた種々なるテクストが、或る時期に一つにまとめられて、現形をとるに至つたのである。ブリハド・アーラニヤカ・ウパニシヤットについて見るに、それは「壺篇」(*Madhukānda* すなはち *adhya*ya I—II)「ヤーヂニヤツルキヤ篇」(*Yajñavalkya Kānda* すなはち *Adh-Adhyāya* III—IV)「補遺篇」(*Khilakānda* すなはち *Adh-yāya* V—VI)の三篇よりなるが、殆んど同文のヤーヂニヤツルキヤ (*Yajñavalkya*) の問答が二・四と四・五とに含ま

れてゐる。この事實から考へると、それぞれの篇(Kanda)は元來別々に編纂されたものであるが、その兩者が後に一つにまとめられ、これに補遺篇が附加されて、このウパニシャッドの現形が成立したのであらう。さうして、ヤーヂニヤヅルキヤの問答の如きは、最も發達した新しい層を代表してゐると考へられる。他の箇所はそれよりも以前に成立してゐたに違ひない。ヤーヂニヤヅルキヤの思想がウパニシャッドの中で最も古い思想であると思ふ<sup>(2)</sup>の見解は、今日學界一般で否認されてゐる。ヤーヂニヤヅルキヤの問答の敘述は、非常に巧妙で技巧を凝らしたものであるから、他の箇所より後に成立したものであると考へる方が適當であらう。さうして各篇(Kanda)の中に古いテクストと新しいテクストとが相並んで存してゐるのであるから、原典成立史の研究を徹底的に遂行するためには、一つのウパニシャッドを各部分部分に分解して考察しなければならないのである。さうして各部分について、成立順序並びに前後關係を論ずべきである。かゝる分解的な研究を、ベルヅルカール並びにラナーデ

兩氏が相當詳しく遂行したのであるが、今はかゝる細かな問題には入らないで、たゞブリハド・アーラニヤカ及びチャーンドーギヤ・ウパニシャッドが最も古く成立したものであると云ふにとどめて置かう。

更に、アイタレーヤ、カウシータキ、タイッテイ、リーヤ等のウパニシャッドは、前掲の二ウパニシャッドに續いて古いものであり、佛教興起以前のものと思へられるが、この三者の年代的前後關係については、諸學者の説が一致してゐない。この三ウパニシャッドの中にも、新古の層が併存してゐるから、一々の箇所についての年代的前後關係を問題とすべきであつて、一つのウパニシャッド全體と他の一のウパニシャッド全體との關係については、年代的前後關係を決定しようとする試み自体が無理なものかもしれない。ケーナとイーシャードとは、内容の短いウパニシャッドである爲に、年代を決定する爲の積極的な手がかりに乏しいが、佛陀以前か、或は同時と見做してよいであらう。ドイセン<sup>(6)</sup>は、イーシャードはカータカの影響を受けてゐる、と云ふが、我々は直ちに之に

等(3)のウパニシャッドの成立年代(下) 中村

賛成することは出来ない。たゞ有神論的思想の先驅と見做し得るから、初期ウパニシャッドの中では遅く成立したものであらう。またケーナ・ウパニシャッドは、前半が韻文、後半が散文で書かれてゐて、中期ウパニシャッドへの移行行きを示してゐると一般に考へられてゐる。

以上の初期ウパニシャッドは、佛陀以前に成立したものでなければならぬと云ふ積極的な證據は存在しないのであるが、しかし中期及び後期の古ウパニシャッドと比較すると、非常に顯著な相違が種々なる點について認められてゐるので、カータカ・ウパニシャッド以下とは、年代的にも相當の間隔の存在することを認めざるを得ない。従つてその成立年代は、どうしても佛陀以前と考へなければならぬのである。しからば、同じ古ウパニシャッドの中でも、初期ウパニシャッドと中期ウパニシャッドとの間にはいかなる相違があるか、兩者の特徴を對比してみよう。

(1) 初期の古ウパニシャッドは、後に述べる如く、ブラーフマナ或ひはアーラニヤカの一部を占めてゐる。従つて、そ

の成立年代は、大體に於いてブラーフマナ或ひはアーラニヤカの年代に近接してゐて、それらより大して遅れてゐなかつたであらうと思はれる。これに反して、中期並びに後期のウパニシャッドは、ブラーフマナ或ひはアーラニヤカとは別な獨立なものとして傳へられてゐる。それらはいづれかのヴェーダ枝派に所屬すると傳へられてはゐるけれども、各枝派との内面的な必然的聯關が判然としてゐない<sup>(6)</sup>。従つてそれらの成立年代は、ブラーフマナ及びアーラニヤカのそれからは相當に隔つてゐると考へられる。

(2) 初期ウパニシャッドの言語・構文は、それらが編入されてゐるブラーフマナ或ひはアーラニヤカのそれに非常に類似してゐる。それらの文章は皆單純な、また幾分ぎこちないが古風な散文で綴られてゐて、それ獨特の雅致がある。文體は大體散文であるが、その間に所々韻文を點在せしめてゐる。(ケーナ・ウパニシャッドの前半だけは韻文であるが、それは初期ウパニシャッドの中では最も遅いものであると考へられてゐる。)ところがこれに反して、カータカ以後、すな

はち中期のウパニシャッド(ブラシナ以外)は優雅典麗な韻文を以て綴られてゐて、そこには詩人の技巧の跡が認められる。従つて、ブラーフmana或ひはアーラニヤカの言語文章とは、全然相違してゐる。またブラシナ・ウパニシャッドの散文の文章にも、ブラーフmana或ひはアーラニヤカ的な特徴は殆ど認められない。

(3) 初期ウパニシャッドはブラーフmanaと同様に祭祀に言及すること多く、またアーラニヤカ的な寓喩を多く有するが、中期ウパニシャッドには極めて少ない。

(4) 初期ウパニシャッドにはブラーフmanaやアーラニヤカに於いて屢々用ひられる語法或ひは表現法が種々存するが、ウパニシャッド特有の語法或ひは表現法は認められない。これに反して中期ウパニシャッドの中には、ヴェーダーンタ的思想を言現すための定型的語法或ひは表現法が隨處に繰返されてゐて、熟語的用法が既に完成されてゐるし、また初期のウパニシャッドの文句をそのまま採り入れてゐる場合もある。

(5) ウパニシャッドの中心觀念であると共に一般に考へられてゐるブラフman及びアトman並びに輪廻・業・解脱の思想が、初期ウパニシャッドに於いてはまだ發達途上にあり、確定せる哲學的概念とはなつてゐないが、中期ウパニシャッドに於いては、それらが既に確定せる、一般に承認された觀念或ひは思想として扱はれてゐる。

(6) 初期ウパニシャッドは分量が大であるにも拘らず、インド哲學一般の術語が割合に用ひられてゐない。中期ウパニシャッドに至つて始めて多數の哲學的術語が登場して來る。例へば *cetana*, *cetas*, *caitanya*, *cit*, *cetana*, *avyakta*, *ahamkāra*, *karana*, *karana*, *kārya*, *kriyā*, *tanu* (肉體), *dēha*, *dēhin*, *dravya*, *nivṛtti*, *parivāna*, *prakṛti*, *pratyaya*, *phala* (結果), *mokṣa*, *śakti*, *sarvaga*, *sarvajña*, *sūkṣma*, *hetu*, などインドの諸哲學派を通じて用ひられる術語が、中期ウパニシャッドに於いて始めて現れてゐるのである。<sup>(60)</sup>

(7) 初期ウパニシャッドの中にはサーンキヤ哲學を思はせる思想或ひは表現は極めて乏しいが、中期後期のウパニシャッド

ド、殊にカータカ、シヴェーターシワタラ、マイトラヤーナ・ウパニシャッドにはサーンキヤ並びにヨーガ思想の影響が著しい。

以上の如く、初期ウパニシャッドと中期ウパニシャッドとの間には、内容的に著しい相違が存在するから、兩者の成立年代は相當隔つてゐたに違ひない。すなはち、初期ウパニシャッドの作製された時代は、中期ウパニシャッドが宗教詩人によつて詠ぜられた時代よりも遙かに以前であつたと考へられる。

このことは他の事實からも立證される。文法學者カーティヤーナの評釋並びにボタンヂャリの大註解書に於いては、シヤタパタブラーフマナの中に現はれる大學者ヤーヂニャヅルキヤの名を挙げ、ボタンヂャリは Yajñavalkya Brāhmaṇinī に言及してゐる。故にカーティヤーナの時代には、恐らくブリハド・アーラニヤカ・ウパニシャッドの部分をも含めてのシヤタパタ・ブラーフマナが既に成立してゐたのみならず、ブラーフマナ聖典としての權威を附與されてゐたに

ちがひない。さうして初期の古ウパニシャッドは恐らく語源學者ヤースカの出現以前に成立してゐたのであらうと考へられる。ヤースカの語源學書「ニルクタ」の表現法は、ヴェーダの言語からパーニニ文典の規定する言語に至るまでの中間に位するものであるから、ヤースカはパーニニ以前の人であらうと普通云はれてゐる。<sup>(10)</sup>ところでそのニルクタの中に出て來る種々なる單語、特に言語學的術語の意義或ひは解釋は、アイタレーヤ及びカウシタキ・ブラーフマナ、チャーンドーギヤ・ウパニシャッドなどに現れてゐるものと一致してゐる。<sup>(11)</sup>ヤースカはこれらの聖典に直接に言及したり、或ひは直接にそれを引用してゐるのではないが、しかしこの事實から考へると、これらは恐らくヤースカ以前に成立してゐたと考へて、ほど大過ないであらう。ヤースカの年代を確定することは困難であるが、ともかく初期の古ウパニシャッドは、パーニニよりも相當以前に成立してゐたことは疑無い。

かゝる推定は、初期ヴェーダーンタ學者についての所傳からも確かめられる。ヂャイミニヤバードラーヤーナよりも以前

のヴェーダーンタ學者、すなはちバーダリ、カーシヤクリツナ、カールシナーデニ、アートルレーヤは、種々なる祭事經(Kalpashūtra)の作製されつゝあつた時代の人であり、アーシ馬拉ティヤはバーニニと同時代であり、カーシヤクリツナはカーティヤーヤナよりも以前の人であり、アウドウローミはパタンデキリよりも以前の人である<sup>(12)</sup>。ところでブラフマ・スートラから見ると、これらの學者は、皆ブリハド・アーラニヤカ及びチャーンドギーヤ・ウパニシャッドの諸箇所<sup>(13)</sup>の趣意について論議してゐるのであつて、他のウパニシャッドとは無關係である。故にこれらの學者の生存してゐた時代には、少くとも此の二のウパニシャッドは一應編纂され終つてゐて、しかも聖典としての權威を有してゐたと考へられる。しからばこの兩ウパニシャッドは、こゝに擧げられたヴェーダーンタ學者たちよりも、どうしても數百年以前に成立したものであらう。

ところで種々なる祭事經の作製された時代、並びにバーニニ、カーティヤーヤナ及びパタンデヤリの生存年代が問題と

なる。嘗てマックス・ミュッラーはスートラの作製された時代を紀元前六〇〇—二〇〇年と定めた。その根據は、紀元後十二世紀に成立した物語集 Kathasaritsagara の記述に本づいて、文法家カーティヤーヤナの年代を紀元前四世紀後半と推定し、それを祭事經作者たるカーティヤーヤナと同一視して、こゝに一つの基準を求め、諸學者の年代的距離を大まかに計算して、スートラ時代の始めを紀元前六〇〇年頃となし、他方スートラ時代の終りをカーティヤーヤナより約三世代後を見做して、約紀元前二〇〇年と定めたのである<sup>(14)</sup>。その後彼の説は學界の通説の如くなつてしまつたが、Kathasaritsagara の記述そのものが歴史的資料としてはそのまゝ信用し得ない上に、文法家たるカーティヤーヤナと祭事經作者たるカーティヤーヤナとを同一人と見做すことにも疑問の餘地がある。従つてマックス・ミュッラーの擧げた數字は甚だ不確實である。但し彼の擧げたスートラ時代の最下限は、大體採用してよいであらうと思ふ。その理由の一つとして、アーパスタンバ律法經の現形は大體紀元前三〇〇—二五〇年頃

或ひはそれ以後に編纂されたものであらうから、一般祭事經も大體その前後に置いて差支へないであらう。またパーニニは大體紀元前三五〇年頃、文法家カーティヤヤーナは二五〇年頃、またパタンチャリは大體一五〇年頃に生存してゐたと云ふのが學界の通説となつてゐる。その數字を立てた根據は甚だ薄弱であるが、これらの年代が誤つてゐるとしても、それらより多少後世に動かす程度であらう。さうして前述のヴェーダーンタ學者たちは大體この時代(或ひはそれ以前)に生存してゐたのであるから、かれらの生存年代はほど紀元前三世紀を中心とした前後であらう。しかれば、ブリハド・アーラニヤカ及びチャーンドーギヤ・ウパニシャッドの中の諸部分分は、それよりも幾百年か以前に成立してゐたのであらうから、この兩ウパニシャッドの中の多くの部分は、たとひ現形の如くに編纂されてゐなかつたとしても、佛陀以前には大體成立してゐたと考へなければならぬ。

原始佛敎聖典並びに原始チャイナ敎聖典を通じて見ると、當時の思想界は非常に發達してゐて正に蘭菊美を競ふの状態

に在つたが、初期ウパニシャッドに見られる思想の中には極めて幼稚素朴なものも少くなく、一般原始民族の信仰と共通なものも存する。従つて初期ウパニシャッドが原始佛敎並びにチャイナ敎聖典よりも遙か以前に成立したと云ふ想定は、充分な根據がある。中期ウパニシャッドに於いては、一般哲學界の影響を受けてゐるために、思想が著しく進歩し、哲學的用語にも富んでゐるのであらう。

しかれば初期ウパニシャッドと中期ウパニシャッドとの間に年代的にどれだけの間隔があつたかと云ふことになると、もはや何らこの問題を決定し得る資料がない。従つて初期ウパニシャッドについての諸學者の年代論は、全く單なる推定の範圍を出ないのである。たゞ、カータカ・ウパニシャッドが佛陀時代より程遠からぬ時代に成立したのであるから、従つて、初期ウパニシャッドはどうしても佛陀以前のものと考へなければならぬ。さうして特にブリハド・アーラニヤカ及びチャーンドーギヤは佛陀時代よりも遙か以前に遡らねばならぬといふ事が斷言できるのである。

- (1) First: Kuhn's Zeitschrift, XLVII, 1915. pp. 20; 60. (原井尙未出の發見年表の之を知る。)
- (2) Deussen: AGPh. I, 2, S. 208 ff.
- (3) Belvalkar and Ranade: History of Indian Philosophy, Vol. II; Belvalkar: Lectures, pp. 44—45.
- (4) カウシキ・ウツリシキヤルノカウシキ・ウツリシキニ関する何らの内的聯繋を有しなから、遅く成立したかの爲め、ウツリシキ一文字を譯してケイ(Keith: Aitareya Aranyaka, Introduction, p. 41, n. 2)
- (5) Deussen: A G Ph. I, 2, S. 24.
- (6) Cf. Max Müller: ASI, p. 122, n. 1.
- (7) 例ぐに「雜論」(Gemsūtra)と云ふ語が初期の古キリシキヤルの中に見られるが、カータカ・ウツリシキヤルに於いて始めて現れて來る。また解脱を意味する moksa と云ふ語は Svet. Up. VI, 16; Maññi-Up. VI, 20; 30; 34. になつて始めて用ゐられる。ウツリシキヤルに於いては mukti (Bṛhad. III, 1, 3; 4; 5; 6), vinoksa (Bṛhad. IV, 3, 14; 15; 16; 33), vipranoksa (Chānd. VII, 26, 2), atimukti (Bṛhad. III, 1, 3—6), atimoksa (Bṛhad. III, 1, 6) 等の語が解脱に與る觀念を言説してゐる。從つて初期ウツリシキヤルに於いては「雜論」及び「解脱」が未だ判然たる哲學的觀念とはなつてゐなかつたのである。
- (8) ヤロウ譯「山田・伊藤博士譯『印度古代雜論』三三一三四頁。
- (9) Vārttika 4 under IV, 2, 66; Mahābhāṣya ad IV, 2, 66.
- (10) B. Liebich: Zur Einführung in die indische einheimische Sprachwissenschaft, II. Historische Einführung und Dhātupāṭha, SHA. 1919, S. 28—29.
- (11) B. Liebich, op. cit. S. 8—18.
- (12) ウツリシキに於いて他の機會に體する。
- (13) Max Müller: ASI., pp. 239—245; 300 ff.
- (14) これに於いては他の機會に發表する。
- (15) キリシキ人メガステネスは紀元前三〇〇年頃のインドのキロン(Barzanes)の思想を傳へてゐるが、その中には「古キリシキヤル」に於いては既に述べた如く「新」の思想が語してゐる。故に今この初期の古キリシキヤルに於いてはメガステネスの



来たよりも遙か以前に作成されたと考えねばならない。

#### 四 結 論

さて以上の考察の結果を表示すると次の如くなる。

#### (一) 初期ウパニシャッド〔佛陀以前〕

第一期  
ブリハド・アーラニヤカ  
チャーンドギーヤ

アイトレーヤ

#### 第二期

カウシータキ  
ウイッテイリーヤ

#### 第三期

ケーナ  
イーシャ

#### (二) 中期ウパニシャッド〔佛陀前四六六—三八六〕以後〕

カータカ 三五〇—三〇〇

ムンダカ " " "

ブラシナ " " "

シヴェーターシヅタラ 三〇〇—二〇〇

ウパニシャッドの成立年代(下)

中村

#### (三) 後期ウパニシャッド

マイトラーヤナ(ルマイトリ)二〇〇—?

マーンヅギーヤ

〇—紀元後二〇〇

右の列挙は大體成立順序に従つてゐる。すなはち年代順である。嚴密に云ふならば、個々のウパニシャッドのそれ／＼の部分について成立順序を論じなければならないが、かゝる細論には入らずにたゞ個々のウパニシャッドを一つの單位として成立順序を示すならば、ほど右の如く云ひ得るのである。従つて右の表の中で後に擧げたウパニシャッドの或る部分が前に擧げたウパニシャッドの或る部分よりも古く成立してゐることも有り得るであらう。かゝる細かな議論は將來の研究に俟たなければならない。

なほこの外にも、ヴェーダ本集の一部が後世にウパニシャッドと見做されるに至つたものも若干存するが、それらはウパニシャッドとしては重要な意義を有しないから、こゝでは省略することにする。<sup>(1)</sup>

(1) cf. A. Weber: History of Indian Literature, pp. 52, 108

## 附論 新ウパニシャッドの成立

### 年代

さて以上に於いては、一般學者が古いと認めてゐる十三或ひは十四の古ウパニシャッドの成立順序並びに年代を考察したのであるが、これらのウパニシャッドは、このやうに成立年代も異り、また重要視される程度も相違してゐるけれども、古い時代に成立したものであるために、古代インド思想史を知るための重要な資料となつてゐる。しかしウパニシャッドなるものは、これだけに止まらない。その後も引續いて著され、ウパニシャッドといふ名を冠せられて今日に傳はつてゐるものは、其他に二百以上もある。<sup>(1)</sup> これらを總稱して「新ウパニシャッド」と呼ぶことにする。この新ウパニシャッドは、それ／＼いづれかのヴェーダ枝派に屬するものとされてゐるが、しかし實際にはヴェーダ枝派との關係は不明であり、同一のウパニシャッドについても傳説によつて所屬關係が種々異つて傳へられてゐる。<sup>(2)</sup> これらは普通はアタルヴ・

ヴェーダ所屬とされ、アタルヴ・ウパニシャッドなる名のもとに包括されてゐるのであるが、内面的な聯關は認め難い。蓋しアタルヴ・ヴェーダ本集は他の三ヴェーダ本集とは稍異つた性格を有するために、後世成立した諸ウパニシャッドをこれに結びつけて考へるのが、最も自然だつたのであらう。

これらの新ウパニシャッドは、或ひは散文、或ひは散文と韻文との混合體で書かれ、或ひは部分的には敘事詩の *Shloka* で書かれてゐることもある。さうして必らずしも同一の *recension* で傳へられず、同名のウパニシャッドが種々なる *recension* で傳へられてゐることもある。<sup>(3)</sup> その内容を見るに、いづれも比較的短かく、主題に統一あるのを常としてゐる。後世の哲學或ひは宗教の影響を受けてゐることが多く、ヴェーダよりもむしろプラ・ナヤクントラに近いものも存する。その内容は多種多様であり、なか／＼簡単に區分することはできないが、新ウパニシャッド研究の開拓者であつたウエーバーはそれらを大略次の三種に分類した。<sup>(4)</sup>

第一類 アートマンの本性を研究するもの。

第二類 ヨーガの修行によつてアートマンと合一する手段  
方法を教へるもの。

第三類 シツ神或ひはヴィシヌ神の崇拜を説く學派的特徴  
の著しいもの。

更にドイセンは、アタルヴ・ヴェーダ所屬と稱せられてゐる  
ウパニシヤツドの中で最も普通に知られてゐるもの三十九種  
を選び、その内容に従つて次の五種に分類した。<sup>(6)</sup>

一 純ヴェーダーンタ・ウパニシヤツド (九種)

(Mundaka, Prashna, Mandukya,) Garbha, Pirāṅginhotra, Pinda,  
Ātma, Sarvopaniṣatsūtra, Gāruda.

二 ヨーガ・ウパニシヤツド (十一種)

Brahmavidyā, Kaurikā, Gulikā, Nīlābindu, Brāhmaṇābindu,  
Amrātibindu, Dhyānābindu, Tejōbindu, Yogasikṣā, Yogatattva,  
Hamsa.

三 通世 (Sannyāsa) ウパニシヤツド (七種)

Brahma, Saṁnyāsa, Arṇaveya, Kṣaudhāsruṭi, Paramahansa, Jihvā,  
Āsrama.

四 シツ・ウパニシヤツド (五種)

Atharvāsiraś, Atharvāsikṣā, Nīlarudra, Kalīgnirudra, Kaivalya.

五 ヴシヌ・ウパニシヤツド (七種)

Mahā, Nārāyaṇa, Āmābodha, Nṛsimhapurāṇikāpaniya, Nṛsiṁ-  
hottarakāpaniya, Kṛṇāpūrvakāpaniya, Rāmoṭarakāpaniya.

この分類は、必ずしも厳密なものではない。例へば、ブラ  
フマンの認識を教へてゐるウパニシヤツドは、その實踐法と  
してはヨーガを教へてゐることが多いから、これらは(一)と  
(二)との兩者にまたがつてゐるし、また或るヨーガ・ウパニ  
シヤツドは、ヴィシヌ神の崇拜を教へてゐるから、それらは  
(二)と(五)とのいづれにも屬し得るのである。従つてこの分  
類法は完全なものとは云へないが、しかし便利であるので、  
結局多くの學者に依用されてゐる。右に擧げられてゐない他  
のウパニシヤツドも大體右の五類の中のいづれかに收められ  
得ると考へられる。なほヴィンテルニツツは右の五類の外に  
性力派 (Śakta) のウパニシヤツドなるものを立ててゐる。<sup>(6)</sup>  
かく諸學者の分類は必ずしも一致しないが、それによつ

ても解るやうに、新ウパニシャッドの内容は非常に多様である。これらの新ウパニシャッドの成立年代についてみるに、紀元後まもなく成立したのであらうと思はれるほど古いものもあるが、また紀元後十數世紀になつて始めて成立したものもあり、全く不定である。たゞその中でも Jabala, Paramahansa, Subala, Garbha, Atharvasiras, 並びに Vajrasūctika 等は比較的早く成立したものであらうと云はれてゐる。<sup>(7)</sup>

ウパニシャッドの成立年代に關する卓見の主要は以上の如くである。元來、古代インドの宗教聖典の成立年代は、おほよその見當をつけることさへも、頗る困難である。この小論も、大體に於いて、従來の諸學者の推定と大差ない結論に到達した。今後、研究はますます精密に進められねばならぬが、しかし新資料が現れない限り、年代を一層精密に定めることは困難であらう。

- (II) A. Weber (HIL, P. 155, n.) によつて、ウパニシャッドと稱せられるものを三五數へることができると云ふ。但しその中には同じウパニシャッドが、異つた名で呼ばれてゐることもあるかもしれない。

- (2) Winternitz, History of Indian Literature, I, pp. 241-242.  
 Winternitz: op. cit. vol. I, p. 241.  
 (3) Weber: op. cit. pp. 156 ff.  
 (4) Deussen: Sechzig Upanishads, S. 543.  
 (5) Winternitz: op. cit. Vol. I, p. 240.  
 (6) Winternitz: op. cit. Vol. I, p. 240.  
 (7) ناه برهتو، 「印度人はアレクサンダーの遠征の遙か以前から、イラン人乃至ヘルシヤ人を通じて間接にギリシヤ人に關する知識を有してゐた筈である」と云はれるが、インド側の資料では「ありとあらゆるやうには斷定できない。たゞギリシヤ、イラン方面の資料にインド人のことが言及されてゐるのである(例へば Winternitz: Geschichte der indischen Literatur, III, S. 383, Ann. Poushn: Dynasties, p. 365, Rapson: Cambridge History of India, I, p. 674 f. などに擧げられてゐる諸文献參照)。また Yavana の語形がギリシヤ語からの直接の轉化ではなくて、むしろ古代ヘルシヤ語を通じての變化である」として A. Weber (History of Indian Literature, p. 220) の主張するやうに、アレクサンダーの連れて來たヘルシヤ人通譯によつて一般にこの名稱が普及したとも考へられる。殊にバーニニのやうな文法學者が文法上の實例としてギリシヤ人の文物をもち出すためには、主として農村の指導階級であつた婆羅門たちの間で、ギリシヤ人なるものが民族的社會的壓力として感じられてゐなければならぬ。近時バーニニ生存年代を遙か古くに置かうとする學者もある (e. g. Balyakkar: Systems of Sanskrit Grammar) が、従來の定説を顛すほどのものではないと思ひ、わたしは言及しなかつたのである。しかしバーニニの年代及びヤブナの問題は重要であるから、今後ますます學界に於いて論議されることを期待するとともに、本稿掲載につき種々懷教授に御高配頂いたことを厚く感謝する。